



TITLE:

(随想)学会余禄

AUTHOR(S):

道中, 信也

CITATION:

道中, 信也. (随想)学会余禄. 泌尿器科紀要 1964, 10(6): 295-296

ISSUE DATE:

1964-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112572>

RIGHT:

〔泌尿紀要10巻6号〕
昭和39年6月

泌 尿 器 科 紀 要

第 10 巻 第 6 号

昭和 39 年 6 月

随 想

学 会 余 録

広島大学医学部講師 道 中 信 也

海外の学会に出席された諸先輩の外国学会印象記なるものは、口演内容のほかに、ところどころ痛烈な批判が書き加えてあつて面白いものですが、およそ国内で催された学会の印象記は結構づくめでおざなりなものが散見されます。以下広島での第52回日本泌尿器科学会総会に対して当事者である私なりの批判を記してみたいと思います。

閉会時に、およそ800名の参会者を前に、次期会長の穴戸仙太郎教授が「来年の総会にそなえて、広島でのこの会場の中に十数名ものスパイを送り込んで、その成りゆきをつぶさに調査して居たんだ」と準備に対する苦勞の一端を述べて居られましたが、舞台裏で之を聞いていた私の胸中には過去一年半の想いがまざまざとよみがえる気がしました。実は筆者も先年、大阪での総会の際に教室の地土井講師と二人で井上彦八郎助教授のもとを訪い、学会開催までの所謂裏方の苦勞ぶりを阪大の医局に頑張つて、その人員構成、相互間の連絡方法、経済面でのやりくり、果ては会員諸氏に対する配慮までつぶさに御指導をいただき、且つ検討を加えました。一方広島大学側でも、臨床部門において一教室が単独で総会を引き受けたのは吾々の教室が最初であり、しかも宿題報告も同時に受けた訳で、各教室から成りゆきを興味をもつて見つめられていました。教室員は文字どおりの不眠不休で会期が迫るにつれ、その心情は察するにあまりある状態。当時は総員15名の医局構成でしたから誰一人が欠けても研究室の機能は停滞してしまう有様でした。私は暇をみては金策に走りましたが、この間における同門会および地方会員の諸先生方の御尽力も嬉しいはげましとして鞭の様にはね返つて来たものです。今にして顧りみれば、和と寛容のたまものと言えるでしょう。

学会は、いうまでもなく、あくまでも学問的な水準をあげるように努力しあう会合です。その意味では普通の講演会と異なり、吾々の学会は世界で最も進んだものでなければならないし、それに沿つた企画を立てるべきだと思います。

その信念のもとに、学会の運営には加藤会長の意向を主軸にして、出来るだけ多くの会員に発表の機会を与える方針をとりました。内容が多彩にわたつて居るため、どの様にしてよいか全く手のつけられないほどの混乱ぶりでしたが、皆様方の御援助があつたお蔭で無事収拾がつかしました。いちばん難点であつたのは時間的な制約で、口演数を減じて追加討論を自由に行う事も考えましたが最終的には両者とも制限しない事としました。ちなみに口演数81題に対し追加演題は71題、90%近くの追加があつた訳です。

シンポジウムで印象に残つたのは稲田教授の司会が水際立つたあざやかさに聴衆を魅了しましたが、時間をあずかつて居る吾々でさえ、もう少し余裕があつたらと惜しまれた幕切れでした。しかしその蔭には講演者との再度にわたるミーティングと時間の配分に対する深慮があつたからだと聞きました。

時間的な制約に対しては分科会場を、という考えを抱いて物色しましたが地理的な難点の

ため実現出来ませんでした。本来ならば パネル形式により 当日の特別講演や シンポジウムでとり上げられた発表を実際面からみてどの様に意味づけるかという事を判り易く話し合う方式が望ましいものでした。

学会も生きものと同じ様に年を加え 社会形態が変動するにつれ 大きく成長しています。昭和35年頃を境としてそれ以前は むしろつつましかですが以後急速に増大し 年を追う毎に演題報告数が増加 特別講演 シンポジウムも盛んになつていきます(別表参照)

今後どの様な変貌をみせるか 主催者側の苦勞されるポイントであろう。

学会の目的は学問の討議のほかには会員相互の交歓という大切な役目をもっている。このため従来から学会主催者が何百万という金を無理さんだんして集め 評議員会や理事会と会長招待宴にする向きが強く現われるきざしがあつた。この傾向を打破すべく数カ所で会合を開いて医局の先鋭諸氏の親睦を計る予定でしたが 会場とか経済面で行きづまり不成功に終わったのは残念でした。もつと若い世代での討議 交歓の場を持ちたいものだと思います

閑話休題 広島には名所旧跡などは殆んどなく観光行事計画には困りましたが 考えあぐんだ末に思い付いたのが瀬戸内海の船の旅でした。幸せなことに かつて軍港で名を馳せた呉市には海上自衛隊の軍艦が居る。早速交渉をはじめ 加藤教授と自衛隊総監との会見も済み すらすらと事が運びました。之で安心して居たところ 或る晩オンボロ軍艦が兵隊を満載して走っている夢をみた。どうも気に懸るのでわざわざ下検分に出かけたところ 案に違わずの赤さびの出たダルマ船 聞けば近く廃艦になるだろうという代物 再度交渉の結果 皆様方に乗っていただいた駆逐艦クラスの「うめ」に決まつた訳です 本当に前世紀的な夢のおついで冷汗をかかずに済んだ次第でした。更に慾気を出して二艘並べて走らせる心算でしたが 一艘を動かす必要経費が三桁の万円以上要るんだと聞かされ 税金を無駄には使えぬと引きさがりました。瀬戸の内海は天候に恵まれて宮島に到着し吾々一同はつとしました。

アンケートについて：現在 慣例のように行われている全国的な調査は結果が学会席上で報告されますが 報告されている内容が非常に陳腐なものに聞きとれるのは筆者のみではないと思います この問題についてはシンポジウム出席者の方々と懇談する機会がありました 席上でも同様な意向が多数あり 結局はその調査が各個クリーク自体の単なる業績のための報告ではなくても その出来上りは概略的な 内容の淡い集約にしか過ぎないものが多く 調査の依頼を受けた教室或は官公立病院側は迷惑にこそ思え 更に一步踏み込んでの積極的な協力は望み難いものでありましょう。又依頼者側にしても 折角 集録した貴重な症例が内容において不足であれば切り捨てねばならず さりとて補足する訳にもゆかず 症例だけ集めて 最後は文学的な表現で結論を述べる事になります

之を打開するには主旨を同じくする医局が協同で テーマの詳しい検討を行い 調査カードを作製して たとえ意見は異つているにせよ 同一の立脚点からの出発による調査でなければ意味がないのではなからうか 長い期間をかけて仕上げる事が必要だと言う大方の意見でした。

附記：学会が始まる数日前から桜の花がほころび初め 最終日には桜花らんまん、既に散りかけて居ました。遠路わざわざの御来広にも拘らず諸事万端 不行届の点も多く 又 プログラム発送あるいは残務整理につきましても御迷惑をおかけ致した諸先生方に衷心よりお詫び申し上げます

日 泌 総 会	一般講演 (誌上発表)	特別講演	招請講演	シンポジウム
第48回 大阪 (1960)	77 (178)	8	1	1
第49回 金沢 (1961)	72 (195)	1	1	6
第50回 東京 (1962)	19 (68)		3	8
第51回 大阪 (1963)	51 (146)	10		
第52回 広島 (1964)	81 (163) 追加演題 70	6	6	2